

聖典の言葉

「よろこぶべきところをおさへてよろこばざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

万行寺住職 本多静芳



「親死ぬ 子死ぬ 孫死ぬ」これは、一休宗純(一三九四～一四八一)が正月に「何か、めでたい言葉を」と乞われたときに歌ったものだそうです。また、博多の仙涯(一七五〇～一八三七)も、この言葉を語ったとも伝わります。

多くの人々が、このいわれを聞いておられるとは思いますが、この言葉を尋ねた人がめでたくない、不吉であると不満を述べると禅師は、「孫死ぬ 子死ぬ 親死ぬ」といい、どちらの順番の方がめでたいかということを追ったというものです。さて、それでは何故、この言葉が私たちを捉えるのか考えてみます。

聞くとところによると、一休さんは、その臨終に弟子が遺偈(がいぎ)を望むと、「死にとうない、死にとうない」といったとか？ そして、これは仙涯和尚の言葉でもあったといひます。すると、これらの言葉は誰が言ったものという特定を求めることよりも、そこに説かれていることの普遍性が人びとに受け入れられたのではないのでしょうか？

森岡正博さんという生命科学の学者が、『無痛文明論』(トランスビュー、二〇〇三年刊、三八〇〇円)という本を出しています。「無痛文明」という言葉を、森岡さんは大病院に勤める看護師さんの話を聞いていて思いついたそうです。彼女は集中治療室で、意識もなく眠っている患者さんの看護をしていました。その患者さんの身体を取り巻く環境は、現代医学と工学によって完全にコントロールされ、患者さんは安らかな表情で眠りつづけているそうです。そのように「無痛」のまま死に瀕した姿を生きる人間は、それはそのまま「都市」という名の近代科学と工学による「集中治療室」で、快適さにくるまれて眠っているような私たちの生き方そのものではないかという問題提起です。

つまり、痛みのないことが良いことで価値あることとされ、痛みがあることは悪いことで価値のないこととされるわけです。すると、痛みを無くそう、痛みが無くなれば、幸せになれるはずである、という思いこみが私たちの社会を取り巻くようになります。

確かに、手術や歯の治療は痛みが無いに越したことはありません。ところが、それは次のような価値をも私たちに迫ります。例えば子どもを産むならば、健康で能力のよい子の方が価値があり、それが幸せであるということになります。そのため出生前に遺伝子診断などが可能になり、先天的な異常が見つかったとき、産むかどうかということの判断が今、現実には迫られています。

「無痛文明」の価値観に慣らされていれば当然、障害のある胎児を生きたまま中絶します。それは生まれてくる子どもも可哀相だけれど、そのような子どもを抱える自分も可哀相だということが判断されるからです。しかし、現実には生きるということは、意図せざることに直面することです。それをお釈迦さまは、四苦八苦と呼んでいます。つまり、生・老・病・死のいずれも、私の思い通りになるものはない。そのように思い通りになることだけが幸せだと固定的に考えて、そのものの見方にしがみつくと「思い通りにならない」という苦しみを作り出すことになりますというのです。意図したとおりに「無痛」の人生を歩もうとしながら、結果として、「中絶」をした、あるいは、させたという事実を抱えながら生きるということになります。

これは、今、都会では直葬という形で葬儀の形態も問題になっているようです。家族が病院で亡くなっても自宅に連れて帰らず火葬場に直接運び、特に通夜や葬儀のお勤めもしないまま荼毘に付してお骨にすることを直葬といいます(都市部では三割近くが直葬といいます)。第一生命総合研究所の小谷みどり氏の講義によると、心ある葬儀社は形ばかりでも祭壇を用意し、生花をお供えし、葬儀のまねごとをすることを勧めるそうです。それは、あとになって家族が、あのとき、手を合わせて、お勤めをしておけばよかったと後悔することが多いからだと教えて頂いたことがあります。

「親死ぬ 子死ぬ 孫死ぬ」というように、自分の都合のままに意図したとおりにしたいのは、今も昔も変わらない人間の願いでしょう。しかし、そのようにならないのもいのちの事実ですね。そのいのちを生きているのは当たり前、自分の力で生きている、誰の世話にもなっていないと生きるのも一つの生き方です。また一方で、今朝もいのち恵まれた、お陰さまだと手を合わせて感謝の礼拝をしてから一日を始める生き方もあります。

同じ出来事を私たちは、自分の体験や学びなどに基づいて見ているために、まるで違うものとして見ているようです。正月になったら、必ず、「生きられて いのち尊し けさの春」と思わなければいけないと説くのが仏教ではありません。むしろ、そう思えないものを沢山かかえているのが、偽らざるこの私です。だからこそ、日々の「おつとめ」が大切になるのでしょう。それを見込んで如来は難しい行ではなく念仏一つをすすめてくださっています。

合掌

※ここまで読んで下されたあなた、第一水曜日午後六時半の法話会、ナムの会に仏法聴聞にいらっやいませんか？ お待ちしてます。(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。) また、三・五・七・九・十一月に法座があります。「年間行事と法話会」からご覧ください。

万行寺第十八世住職 釋静芳(本多 静芳)

聖典の言葉

「かなしきかなやこのごろの
和国の道俗みなともに
仏教の威儀をもととして
天地の鬼神を尊敬す」
親鸞『正像末和讃』より



昨年しんねんの世相を表す漢字は、「偽」でした。納豆のダイエットに始まり、紅白のまんじゅうとチョコレート、今は餃子が問題です。以前、国会議員がNHKの従軍慰安婦のドキュメンタリー番組制作に口出しをして変更させたのも今思えば「偽」でした。もっともその議員が昨年急に首相を辞めました。番組作りではこれをやらせと呼び、建築では擬装、食品では賞味期限の換装など、もともと余り日常的ではない言葉が身近なものになりました。

さて、親鸞さまは、宗教を大きく真と偽に分けています。一つは、私を広く明るいのちの連帯の世界に目覚めさせる教えが真です。今一つは、私を自己中心の欲望に束縛させ閉鎖的自我の殻に眠らせる教えが偽です。つまり、自分のあり方に目覚めさせる仏教と自我的欲望の迷いの宗教の違いを明確にしたということです。

親鸞さまの浄土真宗の特徴を後の人びとが表現した言葉の一つが、「神祇不拝」じんぎふはいです。文字通り、大乘仏教を生きる念仏者は迷いの宗教の神を拝まないということです。宗教的对象(神、お守り、お札、おキツネ、猫、蛇、ことによると仏ですら)を拝むことで自分だけの欲望を満足させる宗教を当然とする文化的影響を生まれたときから受けているので、この言葉に違和感を覚えたり、反発すら感じるかもしれません。しかし、それは真理・真実に迷う無明や煩惱のせいでしょうか。

今月は豆まきですが、鬼とはなんでしょう？ 多分、「鬼は外」と叫んでいるとき、無意識に「自分は鬼ではない、自分は正しい」つもりになっていないでしょうか？ ある子が、「外に出た鬼さんが隣の家にはいったらどうするの？」と聞くと母親は「隣のことはいちいち考えなくていいの」といったとか？ 面白いやり取りですが鬼って一体誰でしょう？

親鸞さまが、鬼神・神祇不拝を特に主張した『教行証文類』「化身土巻」末(『註釈版聖典』四二九頁)に引用されている経典を現代語に直してみました。

【八三】『般舟三昧経』はんじゆさんまいきやうには、「在家の信者が、念仏の教えを生きる拠り所として聞いていこうというなら、(中略)、仏に帰依し、教法に帰依し、仏教徒(僧)に帰依せよ。生活を(仏教以外の)外道の教えに依ることなく、天を拝むことなかれ、鬼神をまつことなかれ、日の善し悪しをみるなかれ」といわれている。

迷いの宗教の鬼神は「天魔波旬」てまふじんといい、呪力を持つ存在だと迷いの人々から考えられ、信じられている悪鬼・悪神です。この宗教の悪鬼・悪神は、祈ったものは事故から守り、祈らないものは守らないといえます。祈願したものを大学に合格させ、しないものは不合格にするという神があるならば、人間を誑かす神や魔ということになります。

もし付け届をする生徒のみ可愛がり、しないものには目をかけぬ教師がいれば、教職から追放されます。しかし、「神」という名前がつくと問題がないように私たちは受けとめがちです。

そういう鬼(私の迷い)に誑かされず、おそれをもたず、おびえることがない人生を阿弥陀如来は「南無阿弥陀仏」と呼びかけてくれています。私が仏を呼び称えるまことの念仏とは、そのまま「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と如来が私に喚びかけてくれている声だと親鸞さまは(善導大師の)お経の言葉を紹介しています。

念仏の信心を頂く人生は、こうした「ご利益の構造」に惑わされず「無碍の一道」むげいちどうが開かれます。仏が私を護るとはそのように育ててくれることです。すると自分や社会の矛盾や迷いが毎日の生活の中で沢山見えてきます。

かなしきかなやこのごろの 和国の道俗みなともに
仏教の威儀をもととして 天地の鬼神を尊敬す

親鸞『正像末和讃』より

意識：悲しいことに最近の日本の出家も在家もみんな格好だけは、仏教徒なのだが、天地の鬼を拝んでいる

親鸞さまは、上から下に向かって、だから駄目なのだという裁く態度をとっていません。せっかくいのちの連帯(アミダ)の教えに出会いながら、それを断ち切り、狭い世界に閉じこもりとする宗教に振り回されていることを悲しいことであると嘆いています。それはまるで仏教という宝の山に入りながら、宝を発見出来ず、しかも壁に囲まれながらまわりといのちがつながらずに寂しい思いをしているようなものではないでしょうか。

鬼とは誰なのでしょう？ お念仏の豆にあたると痛みが生まれます。しかし、自分の迷いが気づけたからこそ、そこに深いいのちのつながりや、支えられている尊さをありがたいとよろこぶ人生が恵まれます。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ここまで読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会、ナムの会に仏法聴聞にいらっやいませんか？ お待ちしてます(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります)。

また、三・五・七・九・十一月に法座があります。カレンダー、又はHPの「年間行事と法話会」をご覧ください。

聖典の言葉

「余の人を強縁として念仏ひろめよと申すこと、ゆめゆめ申したること候はず。きはまれるひがごとにて候ふ」
『親鸞聖人御消息』(一七)より

「春一番」吹き荒れる

二月二三日(土)、全国的に強風が吹き(都心最大瞬間風速二七・九m)、気象庁は、関東地方で「春一番が吹いた」と発表でした。毎年の春一番もこれ程強いとキャンディーズの『春一番』は聞こえてきません(私、一九五七年生まれです)。午後二時半、西東京周辺で車を南へ向け運転してましたが、バックミラーに映る空が、映画のように暗くなって追いかけてくるようで怖かったです。自然が猛威をむき出しにした時、人間は身を守る行動をします。

自衛艦が日本の漁船を大破

二月一九日未明、イージス艦あたご(艦長・^{ふな と けん}船渡健(五二歳)、乗組員二九六人)が勝浦漁協マグロはえ縄漁船清徳丸に衝突し、吉清治夫さん(五八歳)と長男哲大さん(二三歳)が行方不明となりました。三菱重工業の造船したあたごは、高度な防空戦闘能力を有するといい、全長一六五m、幅二一m、排水量は七七五〇t、費用は約一四〇〇億円もかかります。清徳丸は船長約一二m、七・三tと排水量は一千倍以上の違いがあり、大破しました。

「野島崎沖は船舶の過密海域。関門海峡や瀬戸内海と並ぶ危険個所として海自内でもよく知られている。「ずっと手前で自動操舵を解除し、艦長は起きて艦橋で指揮していなければならなかった。当直士官に任せきりで眠っていたとすれば言語道断」。少なくとも艦長は事前に、当直士官に手動操船への切り替えを指示しておくべきだった」(朝日新聞)。関門海峡を見たことがあります、狭い海峡をひっきりなしに大小の船が上手に行き交います。しかし今回の事故は限られた所に自動操縦で突っ込んだ超大型トラックがオート三輪にぶつかったという印象です。

軍隊は国民をまもるのか？

不思議に思いました。海難現場へ自衛隊の用意した船に乗って被害者家族が出かけるのに差し向けたバスは、よく火葬場などの往復で使われる位の大きさのものです。勝浦へお詫びに出かける途中で一般市民の車にぶつかった防衛大臣の車は立派です。なぜ、被害者に快適な車を用意しようという気が加害者の国の側におきないのでしょうか？

地元では大きな祭が控えていましたが住民から自粛の声が上がったといいますが、その心情はよく分かりますが、そこから自衛隊のあり方を問い、それを制御し国民を国家の横暴からまもる憲法を見つめるような動きが生まれません。そのように慣らされている日本の国民の意識が見えてくるようでした。

国民は軍隊は国民をまもるものだと思いますが、実際、軍隊は国民ではなく国家をまもるための暴力装置としてはたらき、いざとなると国民にはむき出しの暴力が向けられると学べます。

軍隊はコントロールされるべき暴力装置です。そして、その主権は国民であるということを確認し、またそれを国民に保障するのは憲法九条です。毎日、暴力によって問題解決をする訓練と暴力による作戦を練っている人びとの手にそれを委ねるのは大変危ういと何故、私はいえるようになったのでしょうか。

余の人をごうえん強縁とするな!!

宗祖親鸞聖人は、仏教という目覚めていく生き方と権力のある人との関わり方を深く、するどく見抜きました。いや、念仏の信心という目覚めていく生き方は、そこに具体的な徴(しるし)が生まれると示しました。ただ、それは一つの鑄型に人をはめ込むようなものではなく、歴史社会との関わりから一人ひとりに徴がうまれるといえます。

親鸞聖人の手紙に「余の人を強縁として念仏ひろめよと申すこと、ゆめゆめ申したること候はず。きはまれるひがごとにて候ふ」とあります。社会の権力や体制の構造の中で我欲と我執によって矛盾や擬装が生まれます。当時、朝廷や天皇などが道理に背いていることを信心の徴として親鸞は明確に批判し、体制の中で権力に追随・拝跪して生きる人びとを「余の人」といい、それらと手を組み仏法を弘めようと考えすることは「きはまれるひがごと」と厳しく言います。現在も、信心に生きるということは、権力構造の歪みや偽りが見届けられるようになると教えられます。

法に生きる

地元民は、海難事故の直後、海岸で集まり「御法楽」という仏教の行事を始め、二五日、搜索を打ち切るのに当たり「浦終い」という仏法の行事で終えました。この世のことは、虚仮なることであり、当てたよりになるものはない、そして、このことに目覚めさせる仏法こそがまことなるより所だと聖徳太子は見抜きました(「世間虚仮唯仏是真」)。

春一番は人間がコントロールすることはできないから、人は身を守る対応をしてきました。軍隊や国家は人間の作り上げたもの、虚仮なるものですが、それをコントロールするのは仏法に目覚めた私たち念仏者の生き方ですね。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります)。三・五・七・九・十一月には法座があります。カレンダー、又はHPの「年間行事と法話会」をご覧ください。

追伸：アメリカにとって自衛艦事故は世間の目の方向を変えたので、ホッとしよう。しかし何故、今頃、ロス疑惑が再燃したのか？ 振り返ると、官公庁などに関わる疑惑や事故が起こるとき、よく世間の関心を引く事件が突然報道されるのは何故か？ これも私にとって不思議なことである。いや、それを不思議といえるような「子育て」をたまわったというべきか？

昨年12月14日、横須賀基地の護衛艦しらねで火災がおきた。自衛隊員が無許可で持ち込んだ保冷温庫の過熱が原因だ。最重要区画の戦闘指揮所(CIC)付近が焼け、修理に約60億円かかるという。保険に入っているのか？ 一体誰が払うのか？ しらねか？

聖典の言葉

「善惡のふたつ、総じてもって存知せざるなり」

『歎異抄』より

「元社長逮捕」と「チベット暴動」という報道の言葉を考える

日本の司法では無罪で社会的に人権が保障された人が、〇八年三月、アメリカ司法局によって容疑者として逮捕されました。しかし報道を聞いていると日本で無罪の人であるのに人権を無視して「容疑者」と決めつける表現をしています。報道局によっては、「××元社長」と呼ぶところもありましたが、よく考えるとまだ容疑者であり犯人でもないのに、誰か個人を特定できるような報道は、人権を無視しているだけでなく、視聴率をあおる商業主義的で安易な姿勢があると思います（三月三十一日現在、タクシー運転手殺害被疑者は元アメリカ脱走兵としか言っていません）。

一方、世界の心ある人びとを震撼させたチベットにおける騒乱に対する中国当局の武力弾圧の様子を、こともあろうに「チベット暴動」と表現する報道も多くみられました。このような中国政府寄りの報道の表現に対して意識をしていないとチベットの僧侶や人びとが一方向的に騒動を起こしているかのような印象を受けてしまいます。

こうした例は枚挙に暇はありません。本当は、男性側の無意識やそれに引きずられている人びとが問題で女性の差別被害を引き起こしている事象を「女性問題」といったり、イスラエルの対外政策が問題でパレスチナの人びとに武力被害をもたらしている出来事を「パレスチナ問題」といっています。まったく間違った表現とは言えませんが、言葉によって問題をあいまいしたり、人びとの人権意識や報道に対する意識を低下させていきます。

優しさや立派さが、この世を生きにくくさせている

今月の法語は、私が一番苦手としているタイプのもので。どうして、私はこうした教訓タイプのものが好きになれないのかと振り返ることができました。多分、どこかでうさん臭いものを感じるからです。

言っていることは真っ当なのだけれど、結局言っているだけで、私本人は痛くもかゆくもありません。だから、自分や社会の中にある問題点を見ないまま、気づかないままに日々を過ごしていくということになるのではないのでしょうか？そして、そのような標語が街にはいかに多いことか。「オアシス=おかげさま、ありがとう、親切に、済みません」「注意一秒怪我一生」「欲しがりません勝つまでは（これは違う?）」などなど……。

「口が濁れば愚痴になる」というのは、なぜうさん臭いのか？それは、この言葉には、「私は濁っていない口を持っている」、あるいは、「濁らなければ愚痴などない」かのように思い込んでしまう善人意識があるからです。

「徳が濁れば毒となる」も、言うまでもないでしょう。もし愚痴だらけ、毒だらけの自分を意識しないですむような言葉が氾濫すれば、そこには優しい立派なつもりでいられる人びとがあふれることになります。その集団は、そうで無い人を見つげ出し、バッシング(糾弾)します。しかし無自覚ならば、その恐ろしさが分かりにくくなります。自分を優しい人や立派な人と思い込んでいる人びとが増えれば増えるほど、この世は住みにくくなります。

十年以上前、七十歳を越えた経営コンサルタント社長が「私は今まで、誰にも迷惑をかけてこなかった。これからも迷惑をかけずに生きていこうと思う」と新聞投書をしていました。私はこれを読んですぐに思いました。

「この人の周りの人たちは、さぞ迷惑なことだったろうになあ」と。

具体的な現場が見えないと抽象的になる

過日、温室効果ガス排出量の多い上位日本企業が発表されました。新聞の見出しを見たとき「温室効果上位企業」という言葉から、よいイメージを思い浮かべました。「温室化」と聞くと野菜花卉栽培の「温室」を想像して、何だか良い企業のことかと思ったからです(私の発想も問題ですね)。これも言葉の思い込みの問題です。

「地球温暖化」というと南国の暖かいイメージが湧くから生活実感につながらず、人ごとになってしまっている、「地球高熱化・灼熱化」といえばわがこととして考えるようになるのではないかと聞いたことがありました。

これらは皆、ことばに対する感覚の問題です。何気なく見過ごしていると、それによって自分が大切なことを見失い、周りを理解出来ない生き方になるということです(無論、なかなか理解は出来ないのですが)。

朝日新聞(〇八年三月二八日)の天声人語に、日本の食料自給率が極端に低いことが紹介されていましたが、その締めくくりに仏教者として世界的に有名な鈴木大拙博士(一八七〇～一九六六)の言葉がありました。

「食べる人は抽象的になり易く、作る人はいつも具体の事実在即して生きる」

便利で快適な生活をしている私たちは、具体の事実から離れて抽象的なものに慣れているのでしょうか？

森達也監督の『視点をずらす思考術』 講談社現代新書より

この本の目次から「少し視点をずらすだけで違う世界が見える」、「社会の多数派からずれる」と言っています。そして、「親鸞が残した『わからない』の教え」とあります。親鸞さまは、善惡なんて私には決められない。それが私の抱えている事実であり、そこからしかこのかけがえのないいのちの生き方は始まらないのだということです。

合掌

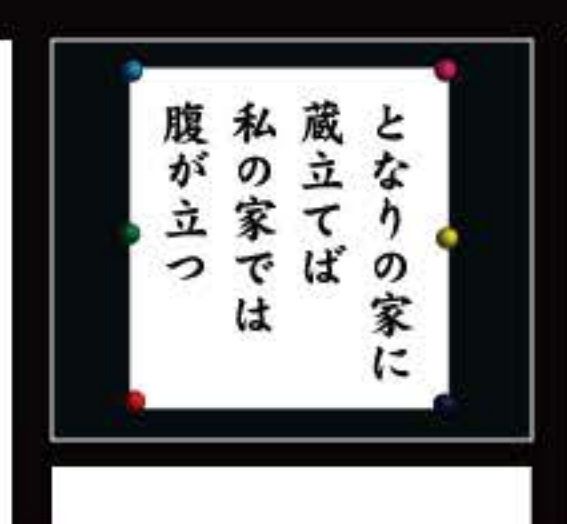
万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。三・五・七・九・十一月には法座があります。カレンダー、又はHPの「年間行事と法話会」をご覧ください。

聖典の言葉

「われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずして迷へるを、おもひしらせんがためにて候ひけり」

『歎異抄』より



チベットの発信する問題とは何か？

三月十日、チベット自治区で僧侶たちの抗議デモから始まった抗議行動が、中国当局の武力的鎮圧によって一四〇名以上の人びとが亡くなりました（インドにあるダラムサラ亡命政府発表）。

四月十九日、築地本願寺で「念仏者九条の会・東京集会」が開催され永六輔さんと無着成恭さんをゲストスピーカーに、私が司会を勤め、「いのち・憲法・わたし」というタイトルのもとチベット弾圧問題にも触れました。

四月二十三日、青山梅窓院では、チベット文化研究会が主催で「チベットの平和を願う集会」が先の死者（敵味方を問わず全ての人）の四十九日法要を勤め、中沢新一さんとペマ・ギャルポさんの対談がなされました。（どちらの集いも、万行寺が加盟しているアーユス仏教国際協力ネットワークが協力してくれました）

チベットの直面する問題は、中国の政治や領土問題ではなくれません。今、広く世界に覆っている「強者が弱者から奪い取る」という安直な「勝ち組・負け組」という価値観が問われる問題を含んでいます。経済的に緩慢で、しかも、虫をも含むあらゆるいのちを尊ぶチベットの仏教文化に対して、中国政府の経済政策がそれを価値のないものとして排除し抹殺しようとしています。権力が自分たちの都合を求めるところに、邪魔となるような真理に生きる人びとがいるということです（これは八百年前、親鸞さんが朝廷から流罪となり弾圧を受けた承元の法難という思想弾圧に酷似した問題を抱えています）。

仏教の教えは、相手を批判し排除するのではなく、共に認め合い、つまり救われる生き方を説くものです。だから、効率性や有用性という経済原理から軽視されるような弱い立場のいのちにも尊さやかけがえのなさを見出し、そこに慈悲を注いでいくものです。チベット仏教は私たちが慣らされている明治維新から今まで続いてきた学校教育を問いにすることでもあります。つまり、役に立つものが重要で、役に立たないものは軽視するというものの見方に洗脳されて、自分の都合に浸かり込んでいる私たちに問題を投げかけています。

「腹を立ててはいけない」という私の願いと「腹の立つ私に気づけ」という如来の願い

唐の時代（六一八～九〇七）の詩人、白樂天が、鳥の巢のように木の上で座禅している鳥窠禪師（ちょうかぜんじ）に向かって地上から言いました「そんな所にいて、危ないですよ」。禪師は答えます「おまえさんの方が、よっぽど危ない」。地上にいれば本当に安全でしょうか？ いや、確かなものを拠り所になっているでしょうか？

さらに白樂天が仏教の大意とは何かと問うと、「諸惡莫作（しょあくまくさ、もろもろの惡をなすことなく）、衆善奉行（しゅぜんぶぎょう、もろもろの善をなし）、自淨其意（じじょうごい、自らそのところを浄らかにする）、是諸仏教（ぜしよぶつきょう、これが諸もろの仏の教えだ）」と答えます。白樂天は「それくらいのことなら三歳の児でも知っている」と言うと禪師は静かに、「三歳の児でも知っているが、八十の老人でも行えぬことだ」と戒めたと言う有名な話があります。

私の心、つまり理性（分別、ふんべつ）では分かっているつもりでも、いざとなるとこの身が自分の都合の良いように理性を左右させてしまうのです。それほど、この身は自己中心で処しがたいのです。親鸞さんの教え、いや仏の教えを聞いていると悪いことをするなという命令はどこにもありません。腹を立ててはいけない、ということを経典は押しつけません。私たちは仏の智慧と慈悲の教えを聞くと、自分中心のわがままな心のまま腹を立ててはいけないものだなあと気づかされていきます。だから、腹を立てる私に気づかされることで、腹を立てないで生きていきたいという私の「願い」が生まれます。

しかし、縁、つまり条件次第で私の腹は立ってしまいます。すると私の願いだけでは、私の生き方は処することができない、つまり自分の抱えている問題に深く向き合うことになります。そして、よくよく考えてみるとそのような自分に向き合うことが出来たのは、自分の力ではなかったなあと気づかされたところを先人は、私を気づかせようという如来の願い（本願力）によって気づかされたと表現してきました。

凶悪犯罪の減少の事実と死刑判決を求める私たちの姿

昨年、日本の治安は悪くなったと答えた人が九〇%近くいました（〇七年三月読売新聞世論調査）が、昨年の殺人件数は一一七三件で、戦後一番少なくなりました（〇八年二月警察庁）。実は、一九五八年を頂点として凶悪犯罪の件数は減少しており、昨年急に少なくなった訳ではありません。しかし、報道はこの凶悪犯罪最小記録更新を記事にしません。むしろ治安が悪くなった分、極刑こそが必要だという声が大きくなります。

この背景には先に上げたような私たちは自分が正しいと自分の都合で見る見方があります。つまり、自分を正しいと認めさせようとするすると周りを加害者にしたがるのです。自分は正しい、自分は善人、相手が悪い、相手が悪人という発想です。不安を煽る報道は受け入れ、安全だという事実を拒絶しやすいというねじれた根性を私たちは抱えているようです。事実を受け入れたがらない、そして、自分の姿も自覚したがらない私たちです。親鸞さんはそんな私たちが共に救われるのは、わが身の罪惡の深きことを知らされることであり、それを知らせる如来のご恩の高いことを知らされることであるということを経典を通して示します。隣の家に蔵が建ったとしても腹を立てるなというのが念仏の生き方ではないようです。自己中心にしか振る舞えない自分に「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」という呼びかけに自分を見届けるところに開かれる生き方でしょう。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳（本多 靜芳）

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。

聖典の言葉

「むみょうぼんのう無明煩惱しげくして
じんじゅ塵数のごとく遍満す
あいどう いじゅん愛憎違順することは
こうぶ がくざん高峰岳山にことならず」

親鸞聖人『正像末和讃』より



雨と人間、治水と政治？

今年は毎週、週末になると雨が降っていたかのような印象を持ちました。

六月二日、関東地方では梅雨入り宣言をしましたが、皆さんはどのようにこの入梅をお感じになっているのでしょうか？

雨降りで湿気っぽくて鬱陶しいのはいやだし、だからといって空梅雨だと農作物などの収穫にも関わるから困る。痛し痒しですが、如何でしょうか？

今年五月二日から三日にかけてビルマ（現在はミャンマーという軍事政権の名を国名としている）ではサイクロンの暴風雨による大災害がありました。また、五月十二日の四川大地震はその後、自然ダムとその決壊という新たな問題を露呈しました。

政治の政は「マツリゴト」といいお呪ないの宗教をいい、政治の治は「オサメル」といい治水事業を示したように、古来、為政者の関心事は「呪術宗教」による人心の掌握と、「治水灌漑」による自然管理による国家統制だったといってもよいでしょう。

今でも、靖国神社国営化にしろ、道路族にしろ、箱物行政にしろ、古い政治の根幹にある課題は変わらないようです。もちろん、古代や中世社会のようにその政治体制を為政者が強制した時代と、近代社会のように主権者である国民が政治体制そのものを選ぶ時代では変わってきていると受けとめるべきでしょうし、そうありがたいですね。

しかし、自然は人間の思い通りにはならないもの、つまり、意図した通りにならないものですから、何とか思い通りにしたい、意図した通りに計画を進めようとしたのが人間の文明の歴史だった訳でしょう。

四苦八苦～思い通りにならないこと

さて、あのお釈迦さま自身も、私たちと同じ様に、自分の思い通りにしたい、意図した通りにしたいというワガママな我欲の心を一杯もっておられたのでしょうか。だから、思い通りにならないことがあるという事実と迷いだらけの自分に目覚めることができたのです。

北インド（今のネパール領）のシャーキヤ族の皇太子であったゴータマ・シッダールタ太子は、幼い頃、神経症の様相を抱えていたようです。農耕祭の折、小鳥が虫を、大鳥が小鳥を食べるのを見て、いのちあるものは殺さなければ生きていけないことに心悩めます。また、城の郊外で、老人の醜い姿を見ては若者もいつかは老いることを、病人の悲惨な姿を見ては健康なものもいつかは病むことを、死者の葬列を見ては生きている者もいつかは死ぬことを自分自身の姿に重ねて悩めます。

いつまでも若く、健康で、生きていたいというのは古今東西を問わず、理性・分別を持った時から抱えている思いです。ゴータマ・シッダールタ太子は、それを見つめ、そこに事実を無視してでも思い通りにしたい、意図した通りにしたいという我が身の姿に目を向けていき、やがてその厳しい思索と深い内省をともなう宗教的な行によって目覚め体験を得て、ブッダ（仏陀）、すなわち目覚めた人と人びとから呼ばれるようになったのです。

後に、その思索はまとめられ定型化して、生・老・病・死という四苦と、あいべつりく愛別離苦・おんぞうえく怨憎会苦・ぐふとつく求不得苦・ごうんじょうく五蘊盛苦という四苦を加えて、四苦八苦と呼ばれます。今、「四苦八苦し」という言葉のもとには、こうした仏教の用語があるわけです。

いい天気という言葉から知れる私の姿～目覚めの念仏

こんな話を聞きました。ラジオのパーソナリティをしていた雪山隆弘さんというお坊さんが、天気予報のコーナーで「今日もいい天気ですね」といったら、お天気おじさんから、「私たちはいい天気、悪い天気と言わないんです。晴なら晴、雨降りなら雨と言うだけなんです」と教えられたといえます。そして雪山さんは、次のように教えてくれます。よく考えたら、たとえ晴れたとしても、日照りが続いた時は「いい天気になった」とは言いません。むしろその雨は「いいお湿り」となります。いい人、悪い人というのも、その人はその家族や仲間にとってまた違った側面がある。だから、私たちはいつも、「私にとって都合のいい天気」「私にとって都合の悪い人」という、「私にとっての都合」という言葉を忘れていてのではないかといわれます。（『お茶の間説法』百華苑より）

親鸞という人は、仏教を学び、念仏を行じていくなかで、「自分の中にある真実に暗い無明煩惱むみょうぼんのうというものが、大変盛んであり、それは空中の塵ちりのようにどこまでも満ち満ちており、さらにその煩惱という自己中心の迷いが作りあげている、「これは愛しい」、「こいつは憎い」という心が互い違いに生まれるのは、高い山があつたり低い丘があるようにどこまで行ってもきりがなし」と『和讃』にうたっています（冒頭参照）。

念仏を称える暮らしをすると段々心が澄んで、今まで見えなかった自分の姿が見えてくることを信心といえます。そういう心（信心）を得ると、頑なになっていた生き方や硬い心が柔らかくなるご利益があると親鸞聖人は説いています。

念仏を称えるとは、私が仏に向かって称えるものだけに思っていた方向性が、実はその本来の意味合いから、仏が私に向かって願い呼びかけてくれていたという深い目覚め体験（信心）が生まれるのです。

私の称える念仏が、「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と如来の呼び声と聞こえる念仏となるように、心して念仏を称え、世の中が安穏となり、互いが認め合えるような生き方を求めたいと思いました。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳（本多 靜芳）

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。

聖典の言葉

「^{うのけ}卵毛・^{ひつじのけ}羊毛のさきにあるちりばかりもつくる罪の、^{つみ}宿業に^{しゅくごう}あらずといふことなしとしるべし」

『歎異抄』第十三条より

「金子みすゞを知っているか?」ということ

過日、本願寺派東京教区保育連盟保育者研修に出講するご縁を頂きました。私の話の前に、集まった約百名ほどの保育士さんなどに向かって、開催者から金子みすゞの詩、「わたしと小鳥とすずと」が紹介されました。そして、会場に向かって、みすゞの名前を知っていますかと尋ねると、手を挙げたのは二十名にもなりませんでした。正直、「アレッ?」と思いました。

幼稚園とか、保育園に関わる人のみすゞに対する関心の多様化を教えられました。同時に、ものごとへの関心は、世代や領域で極端に分かれているのではないかと思います。例えば、今、世代を超えて歌える歌が見あたりません。誰もが知っているテレビ番組も無くなったようです（「サザエさん」と「笑点」はどうか？ 残念ながら知らない人も多いのでは?）。

しかし、一方で今、日本人の行動は極端に同質化しています。事件が起これば皆同じようなコメントをもって、誰かを裁き、糾弾する側になります。そして、そうしないと生きづらいという社会の雰囲気すら作っているようです。

同質化と多様化は一面、まったく異なるようですが、お互いの意志を発言しあえる自由な雰囲気をなくし、ある共通のものに従属する意識を生み出しやすいのではないかと思います。つまり戦前の日本の様な危険な雰囲気ではないでしょうか？

何故、こんな話から始めたかという、「墓参り 合掌した手で 蚊をたたく」という法語を掲げても、「うん？ それがどうした?」といわれかねない状況ではないかと思ったからです。手を合わせるという敬虔な行為の後で、殺生という残虐な行為をしてしまうというギャップのおかしさや悲しさ、そして罪深さということを経験できる宗教感覚を私たちは果たしてもっているか?と考えたからです。

チベットの話～落差に感動する

六月、念仏者九条の会・全国集会で長野に行きました。渡辺^{いちえ}一枝さんというチベットに心を寄せる方もご参加でした（実は、私、椎名誠さんの大ファンなので心中おだやかならずという状況でした。一枝さんは椎名さんのお連れ合いです）。一枝さん（つまり椎名さん）の家にチベットの青年がホームステイをしていた頃、その青年が鰐の皮をむく手伝いをしたのですがチベット史上、彼が初めて鰐の皮をむいたのではないかという話を車中で話していました。そこから、意外な話を聞かせて頂きました。一枝さん曰（いわ）く、「もっともチベットの人は魚や小鳥（禽獣）を食べないのです。むしろ、山羊などの大型の獣を食べるのです」と。その訳を皆さんは分かりますか？「何故なら小さな魚や鳥は沢山（殺し）食べないと人間のお腹は満たされません。山羊などの獣ならば多くの人のお腹を満たします。そうして、なるべく殺生するいのちを少なくしているのです」

ああー、まったく気づかなかった。私とは異なる尊い生き方があるのだなとある意味、愕然としましたが同時にそれを聞いてとても嬉しく感じました。そういえば、映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」でラサで映画館を造ろうとするとチベット人たちの工事は遅々として進みません。理由は土を掘っていると虫が出てくる、その虫を逃がしてやるからでした。

この秋、来日するアメリカの仏教徒ジョアンナ・メイシーさんはその著「世界は恋人、世界はわたし」（ちくま書房）の中で、北インドの地で亡命チベット人の救援活動をしている時、チベットで中国兵によって自分の師匠が酷い拷問を受けたことをある僧侶に語って貰ったことを興味半分、書き留めていた時のことを語っています。その余りに酷い脅迫・強制・拷問の数々を聞き、これを西側諸国へ知らせればチベット人支援運動につながると考えていた時、その言葉が若き僧の口から発せられました。

「Poor Chinese（かわいそうな中国人たち）」

この言葉に不意をつかれて彼女は身震いが走ったといえます。彼の涙は、自分自身や、僧院の僧侶などのために込み上げたものではなく、侵略者たちのための涙だったのです。

「かわいそうな中国人たち、こんなにひどい業（カルマ）をつくってしまっ」

彼女はいいます、「私の慈悲などそこまではおよびもつかないが、それをこの目で見て、理解することはできた。いま私は、それが人間の能力の範囲内にあることを知っている。そしてそのことが、私にとって生の様相を一変させるのである」（一四八頁）

けもの^{けもの}の心～夏至と七夕の夜どうするか？

今年の夏至と七夕、政府が環境省を通して夜、企業や家庭の電気を消しエコロジーを進める計画があるということを東京教区教務所から各寺院に伝えられ、賛同し照明を落とすように勧める文書が来しました。私は、最初、本気で賛同して墓の塀の外側の街灯を消そうと思いました。しかしそれはやめにして、私は私なりにエコロジーな生活をし、人に勧めます。国家や政府が勧めることを当たり前のように受け入れる社会は、人権を深く考える社会とは異質な様相だと思うからです。でも、そのように考え、行動できるような私に育てられたのは、私が念仏を日々称える宗教生活に恵まれたからだだと分かりました。

「私に けもの心の湧く時あり その時も 私は人間の顔して 暮らしている」（榎本栄一さん。一九〇三生まれ）

いい詩だなあと私はつぶやいています。墓参りの前であらうと後であらうと、私を貫く棒のようなものがあるだろうか、と見つめる生活がとても宗教的な生活に思えてなりません。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳（本多 靜芳）

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしやいませんか？ お待ちしてます（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。



くまがわ ごえい
親鸞聖人（熊皮の御影）肖像画

聖典の言葉

「いづれの行^{ぎょう}もおよびがたき身^みなれば、
とても地獄^{いちじょう}は一定すみかぞかし」
『歎異抄』第二条より

「お坊さん」ってどんな人

七月の終わり、二泊三日で、本願寺派長野教区飯山組夏期仏教講習会に出かけました。同組で約二五〇年ほど続く、お坊さんの勉強会、いわゆる夏安居^{げあんこ}が午前中二日間営まれました。その前日、初日の夜は、同組の仏教婦人会(若婦人)の約一〇〇名、二日目の夜は同組の浄土真宗本願寺派基幹運動推進門徒推進員養成の連続講座を受講した人びと約一二〇名の研修会がこの夏安居と共に開催されるようになっています。

以前、僧侶研修会は三日間あったそうですが、その午後に勤められる「大衆供養」が大変なので、二日目と三日目の二日間に減ったそうです。大衆供養とは、安居で集まった僧侶たちが七～八名位で一班を作り、近在の御門徒の家、六～七軒を巡ってお内仏様でその家の方や親戚、あるいは近所の人も集まり、一緒に『阿弥陀経』をお勤めするのです。ところが、これが最近、ある理由でお寺さんが来るのを断り、お布施だけを届けようとする御門徒が出てきたそうです。その理由は、「部屋を片付けるのが大変だからねえ」、です。確かに、仏間はどんな集いにも流用できるよう場合によっては隣の部屋とつなげて大広間にもなるような構造ですが、今、田舎といえども、大型テレビを初め応接セット、その他色々なモノが置かれ生活環境が変化しているのです。

ところで、開会式^{かいばんしき}(開幡式といいます)の折、会所寺院、明德寺住職(私と中央実習で同期、しかも同年齢)の常盤井智行さんが、「私のところでは毎週ピアノ教室に部屋を提供しています。先日、練習に来た小学生に『お坊さんって、どんな人だと思う』と尋ねたところ、先ずは、「お経を読む人」という返事がありました。次に多かったのは、『勉強をする人』という答えだったのです。どこでそんな印象を持たれたのか、嬉しいような複雑な思いでした」と挨拶をしました。

まあ、寅さんも、「男は度胸、女は愛嬌、坊さんお経」といつも言ってますから、最初の答えは的確に坊さんの特徴や印象を語っています。ところで、勉強をする人、というのはどうなんでしょう。私たち講習会に集まった僧侶は講師も、組内の法中^{ほっちゅう}も、こそばゆいような印象を持ちました。しかし、私は後で、ちょっと考えざるを得ないことに思い当たります。

「大衆供養」の話～意識の違いに学ぶ

二日目、今年は涼しいという飯山市小沼地域でも三時間近く約二kmも歩く大衆供養は皆さん汗だくで帰ってきました。これは、多分、盂蘭盆経の故事をもとに、多くの僧侶に対して供養することを基にした行事なのでしょう。ところが、私は帰ってきた住職さんがたと一緒に冷たいものを頂きながら、気づかなかったことを教えられたのです。それはその日、大衆供養を勤めた家の人たちの意識は、「今日は大勢のお坊様に、ご先祖の供養をして貰った」というものだったのです。成程、言われてみれば、たとえ浄土真宗の御門徒さんでも、日常感覚としてポロリと出てしまうのはこういうことなのだと改めて教えられると同時に、僧侶と門徒の意識のずれのようなものを感じました。いや、そう考えるのも、これは「勉強する人」の意識が、どこかで思い上がりを作っているのではないかと深く反省させられたのです。

御門徒さんにとってみれば、お寺の御法座でお説教を聞き、我が人生を仏の教えを拠り所に、如何に生きるべきか、という話を時に求め、あるいは真剣にお聞きになっておられることと思います。しかし、ことの善悪とは別に、お経をお勤めするのは、亡くなった先祖の供養のためという感覚が根深いところに残っているのだと思います。それに対して「勉強する人」であるお坊さんは、お経は仏の教えが説かれたものであり、それを声に出して、お互いが頂くことがお経を勤めることであるということを知識として身につけている訳です。そこから生じる、両者の感覚のずれです。

地獄行きの我が身～お互いさま

今月の法語は、お気づきかもしれませんが、私の好みに合わないものです。しかし、自分で課題にしているので与えられたものを基に法話を作っています。お金を貯め、罪を作るという点では門徒も僧侶も全く同じ姿です。しかし、仏法聞かずに地獄行きとは何でしょうか？ 私は仏法を聞いているがあなた方は聞いていないというなら、滑稽なほど思い上がっています。親鸞さまの教えを聞けば聞くほど、つまり仏法を聞くと、地獄行きの自分の姿が見えてきます。そこに、人を裁き、人間の間に垣根を作り、対立や憎しみを作ってきたのは、この私ではなかったか、そして、本当はお互いさまであったと仏法の道理に自分が照らされるところに、共に、俱に、と一緒に歩いていく世界を恵まれるのは、「地獄は一定すみかぞかし」と自らの姿をお示し下さった親鸞さまであり、その道を歩まれ、そして、この教えを私にまで届け伝えてくれた「ご先祖・先達」のおかげではないかと思いを巡らせています。

子どもの言葉は深いことを掘り起こします。常盤井さんは過日、東京の葬式で火葬場に同行した時、「お祖母ちゃんを焼いたらどうなっちゃうの?」と子どもが周りの大人に聞いていたそうです。どうなるんですか？

やっぱり「仏法聞かずに地獄行き」という言葉は、私が本当にその真意を確かめなければならないなあと思いました。

(しかし、真宗じゃない、信州の蕎麦はおいしかった、そして、お酒も絶品でした)

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります)。

聖典の言葉

「悪性^{あくしやう}さらにやめかたし
ころは蛇蝎^{じゃかつ}のごとなり
修善^{しゆぜん}も雑毒^{ざうどく}なるゆゑに
虚仮^{こけ}の行とぞなづけたる」
『愚劣悲歎述懐和讃』より

「戦没農民兵士の手紙」より

「軍医殿、早ク頼^{もと}ヲツケテクダサイ。ミンナト
一緒ニ、ゴ飯ヲ食ベラレルヨウニシテクダサイ。
(略)ゴ飯ガ食ベタイナ。(略)痰ヲツケテクダサイ。口ノ中ノ血ヲ拭イテクダサイ」
(本文は漢字もカタカナ表記)

これは、「戦没農民兵士の手紙」(岩波新書)に紹介されている大陸野戦病院衛生兵が持ち帰った筆者不明の手記です。たったこれだけの手紙から、戦争のむごたらしさ、恐ろしさ、悲惨さが伝わってきて私は身震いした思い出があります。

東京千代田区の千鳥ヶ淵に国立戦没者墓苑があります。浄土真宗本願寺派では、全戦没者追悼法要を修行し今年で第二八回目を迎えます。今年、私はご縁に恵まれ、「この世のウソを見抜く、智慧の念仏」という題で法話をしました。



- この法要の意義は二つあるといわれます。
- ①二度と戦争という殺し合いの過ちを犯さず、また犯させない確かな決意を新たに心に刻むこと。
 - ②仏教の教えに基づき、戦争で亡くなった全ての人びとを追悼し、いのちの尊さに目覚めること。

①戦争を始めるものは何か？

国が国民に人殺しをさせる戦争を見つめ、話し合いにより問題解決をする道を求めるために、仏教徒である私たちは、自分の行動を見つめなおすことが重要だと私は考えます。

よく、「戦争をしたい人はいない」といいます。この言葉はいかにも真っ当に聞こえますが、自分が抱える「悪性」という自分さよえなければいいという問題を見ていないので、「虚仮^{こけ}の行^{でんぎやう}」という嘘、いつわりという上辺だけの言葉になっています。

現代の妙好人ともいわれた榎本栄一(一九〇三～一九九八)さんは、多くのお念仏の味わいのある詩を残しています。その一つです。

「獣心」～私に獣心の湧く時あり～
その時も、私は人間の顔をして暮らしている

いかがでしょうか？ このように自分という人間を見つめると、私たちの中には戦争をしたがる人間性可能性が見えてきます。

軍需産業やそれを儲けにする人びとが思い出されます。良い悪いではなく私たちの社会の構造がそうになっています。

『バカの壁』で有名になった養老孟司さんが、「小説を読みながら考えた」(双葉社)の中で、「戦争で懲りた人も、懲りてなんかいない人も、敗戦で儲けた人も、損した人もいる」と、私たちのあるがままの姿を示しています。現実には、日本では「教育基本法」を変え、「改憲手続法(国民投票法)」を作り、戦争の出来る国の準備を着々と進めようとしている人がいることに気づかされます(最近では、成人年齢を下げ、改憲がしやすいような動きがある)。また、実際したい人がいるから、大量破壊兵器があると嘘を言ってまでイラク戦争を始めたのは記憶に新しいです。

しかし、こうしたことに気づかないままだと、私の生き方が戦争を始めることを認めたり支えることになります。お釈迦さまは、「知らないでいることはその罪は災いは大きくなる」という旨のお言葉をお示しです。つまり自分が間違いをしていることに気づかないと「愚かだった、お恥かしい(慚愧)」という心が生まれないので、災いが大きいというのです。しかし、私たちはお念仏を称える日暮らしにより、「世間の虚仮」を知らされる智慧を恵まれると親鸞聖人はお示しです。

「凡夫といふは、無明煩惱^{むみょうぼんのう}われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくて、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」

『一念多念文意』『註釈版聖典』六九三頁

「凡夫は迷いの煩惱が身に一杯で、思い通りにしたいという欲が多く、(思い通りにならぬと)怒り、腹を立て、(思い通りになっている人を見ると)羨ましがったり、妬んだりする心が休むことなく、臨終の瞬間まで止まることも、消えることも、途切れることもない」

私と私たちの社会には、戦争の可能性があると深く見つめさせる教えがお念仏です。

②追悼とは慚愧を伴うもの

戦争で殺された全ての人びとを追悼するとは、慚愧の心をもって一人ひとりのいのちの平等の尊さを認め合うことです。この法要のいう全戦没者とは、源平合戦も、ワートルローの戦も、ルワンダの紛争も、あらゆる戦争によって殺された軍人も民間人も全ての人のいのちが含まれています。

親鸞聖人は、この世の出来事は、「虚仮」であると示していますが、虚仮である私たちは偏ったものの見方に振り回されて、いのちを見てしまうことがあるようです。

ブリュッセル大学歴史学者のアンヌ・モレリさんが、『戦争プロパガンダ——10の法則』(草思社、2002年3月)の中で、戦争をした政府が、メディアと結託して流した嘘・情報操作・正義の捏造を分析しました。近代の戦争の歴史の中で同じことが十の法則で繰り返されているといいます。

第1章 「われわれは戦争をしたくはない」——戦争を始めた政府は開戦前にこう言っています。今、私たちの社会は同じ道を歩んでいないか考えさせられます。

第2章 「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」——実際は自分たちが戦争を始めている。

第3章 「敵の指導者は悪魔のような人間だ」——「さるべき業縁のもよおさば、いかなる振る舞いもすべし」(『歎異抄』第13条)のお言葉のように、私たちはご縁次第で思いもよらぬ行いをします。プロパガンダ(政治宣伝)では、悪魔と思ひ込ませ相手を殺すことを偉業と褒めます。しかし、相手から見れば私の行為も悪魔の仕業です。相手を悪魔と決めつける時、自分が悪魔となっています。このように人を悪魔にさせる教えを「鬼神の教え」といいます。

第4章 「われわれは領土や覇権のためではなく、偉大な使命のために戦う」——偉業や正義という偏った考え方を押しつけます。

第5章 「われわれも誤って犠牲を出すことがある。だが敵はわざと残虐行為におよんでいる」

第6章 「敵は卑劣な兵器や戦略を用いている」

第7章 「われわれの受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大」

第8章 「芸術家や知識人も正義の戦いを支持している」

第9章 「われわれの大義は神聖なものである」

第10章 「この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である」

以上は省略します。

私たちは、こうして自分こそが正義だと思い込む時、相手を見下し、思い上がり、自分の主張を押しつけるために、戦争という暴力をふるう過ちを犯します。しかし、気づかされて人間性を回復することこそ、仏教の慚愧(はじる)の心です。

アジア太平洋戦争の間、本願寺派教団は「戦時教学」と呼ばれる体制順応、全体主義の教学を自ら進んで作りました。戦時教学で、「正法」とは天皇の命令であると解釈し、その正法に背くものは浄土に往生することは出来ないと拡大解釈しました。さらに、戦争は天皇の命令によって始めたものだから聖戦であり、戦争に参加するものは菩薩行をするもので、戦闘によって死んだものは必ず全て浄土に往生すると説いて多くの真宗門徒を戦争に動員し、金属製の仏具を供出していきました。

しかし、こういう教学を主張をした人びとからは何の自己反省もなく今日に至っています。私は、国家に迎合した過去の教団教学の事実を見つめ慚愧するところに、まことの追悼が成り立つと思います。

今まで、千鳥ヶ淵における全戦没者追悼法要の意義をお示しになった大谷光真ご門主のご親教に慚愧を伴うお言葉がいくつも見られます。

第十回：一九九〇年

「国立の墓苑でありますから、毎年、政府主催の式典をはじめ、各宗教団体等による儀式が行われています。それらの中で、戦死者の偉業をたたえるためでもなく、霊を慰めるためでもない私たちの法要の趣旨を理解してくださる方がたが、少しづつ増えていることはありがたいことです。この法要の大切な点は、阿弥陀如来のおん前に、第二次世界大戦をはじめ、幾多の戦争で亡くなられた方がたを悼み、世界に平和をもたらす上での反省と今後の営みを、わが身に確かめるところにあります」

第十二回：一九九二年

「追悼とは、いたみ悲しむという意味があります。ですから、追悼法要では、亡くなられた方がたをいたみ、悲しむことを縁として、この私が仏法にめざめ、人間の罪業性に気づき、その上で、亡くなられた方がたの心を受けとめるということになりましょう」

安芸のご門徒が、「原爆で全てが焼け、横川の駅から似鳥が見えました。今の広島町の町並みから全く想像できません」と教えてくれました。

もし、今日の繁栄した社会を戦没者の犠牲のおかげだと感謝をするだけならば、身勝手な自己満足のおかげさまです。自分たちの過去の責任を引き受け、戦争の哀しさと慚愧を伴うものが念仏の智慧から開かれる追悼でしょう。

まことの念仏は、まことの信心、つまり深い気づきを伴うものです。念仏の信心は智慧です。この世のウソを見抜く智慧の念仏を頂くところに私の行動が変わり非戦と平和への一歩が生まれます。心の中で思うだけでは平和は生まれません。

親鸞聖人の「世の中安穏なれ、仏法弘まれ」の心を通して、「ともにいのち輝く世界」を目指し、非戦と平和の決意を世界や子や孫に伝えましょう。

●釈尊のお言葉

「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。
己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ。
すべての者は暴力におびえ、すべての(生きもの)にとって生命は愛しい。
己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならぬ」

『法句経』(ダンマパダ) 129・130偈

私にとって、暴力である戦争は怖ろしい、こわい。その戦争という政策を引き起こす非人間的なあり方を仏教では、鬼神と呼び、親鸞聖人は仏教徒はそうしたあり方を捧まないと言われている。

●聖徳太子(五七四～六二二)「天寿国續帳」のお言葉「世間虚仮、唯仏是真」(意識)この世の人間も、人間が作り出した世間も、すべて皆、嘘、いつわりだらけです。唯、それを目覚めさせる教えこそが真実です。

●親鸞聖人(一一七三～一二六二)は、このお言葉を受けとめた。

そして、嘘、いつわりで一杯の私が、その姿を気づかせる教えである如来様の本願を聞き、念仏を称えという生き方をする中で、自他共に認め合い、救われる生き方が開かれると教えてくれた。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります)。

聖典の言葉

「^{あくしやう}悪性さらにやめがたし
こころは^{じゃかつ}蛇蝎のごとなり
^{しゅぜん}修善も^{そうどく}雑毒なるゆゑに
^{こけ}虚仮の行とぞなづけたる」
『愚禿悲歎述懐和讃』より



テレビの企業コマーシャルより

「ジャイアント・パンダを救えるのは、
人間だけです」

たまにテレビを見るものだから、かえって流れているCMが耳に入り、気になります。このCMも、九月のある日、一回だけ遭遇したものです。聞いた途端に、このようなCMを流してしまえる雰囲気があるから、日本では随分、人権感覚がないままに生活が成り立っているのだなと思いました。また、だから余計に人権感覚を育てる社会になっていかないのだなと思いました。無論、そう論じている自分も、その社会にどっぷりと浸かっているということを実感されます。

ここまでお読みになると、もうお気づきのように私が感じたものは何かのご想像になれたと思います。しかし、その時の私の心の動きを追うことで、少し問題点を整理して、そして、自分を見つめたいと思ったのです。先ず、私は

「ナント、傲慢で、過去の事実を見ようとしないCMだろうか」

と感じたのです。全般に、ラジオに比べると、テレビで使われる言葉遣いは繊細さに欠け、紋切り型の粗っぽい表現で、しかも疑ってかからなければならないようなものが多いように思います。

これは、去年の「納豆でダイエット」やその前の年の「国会議員がNHKの番組作りに圧力をかけた疑い」などを通して、テレビというものは、企業の利益と結びつく視聴率や、その放送局の利害関係と結びついたところで言葉が選ばれたり番組作りがされたりしていることを実感しました。そして、ことによっては情報の操作、捏造などが行われていることを私たちが今まで学んでいます。だから、「NHKは、あなたの視聴料から番組を作っています」という言葉が流されても、私は、「ああ、これは違うな。本当は、「あなたの視聴料を使って、NHKの番組制作スタッフの人たちが、色々なことに気を遣いながら作っています」ということだな」と再確認する癖がつかしました。

環境を破壊しているのは、人間だけです

少なくとも、「ジャイアント・パンダを救えるのは、人間だけです」というより、「ジャイアント・パンダを絶滅に追い込んだのは、間違いなく人間です」といえるのではないのでしょうか？ 自然というものは複雑ですが、お互いが持ちつ持たれつの関係性が自然(じねん)に出来上がってきました。これを仏教では、因縁生起(縁起)の道理だと申します。

この縁起の道理に背いて生きているのは、欲によって迷っている人間だけのようです。自己中心にものを見ている^{あくしやう}悪性という自分を申し訳なかった、恥ずかしかったと気づかされて、南無と頭が下がることを慚愧といいます。お釈迦さまは、

二つの黒い法あり、無慚無愧なり

(この世を滅茶苦茶にするものがあり、それは慚愧の無い生き方だといいます)

といいます。かつて、アジアを救えるのは日本だけだといって、侵略戦争を始めました。最近も、イラクを救えるのはアメリカだけだという発想で、今でも軍隊をおいています。そして同じ発想で、アメリカは日本にも軍隊をおいています。そういうお互いの姿をお互い抱えています。しかし、お恥ずかしい、申し訳なかったという生き方が先ずは私に生まれるように願いつつ、お念仏を称えたいと思いました。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしてます（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。

聖典の言葉

「まったく自見の覚悟をもって
他力の宗旨を乱ることなかれ」
『歎異抄』^{たんいしやう}「後序」より

オバマは黒人初の大統領か？

二〇〇八年十一月十八日（火）の朝日新聞の「新聞ななめ読み」に「オバマ次期大統領「なぜ「黒人」なのか」」という題で、NHKの子どもニュースでも有名なジャーナリスト池上彰さんが次の解説を書いていました。

（前略）オバマ当選の記事を読んで、私には疑問が沸きました。この疑問は、選挙運動中から感じていたものでもあります。それは、オバマ候補について朝日が「米史上初のアフリカ系（黒人）の大統領が誕生する」と表記していることです。（中略）

オバマ氏の父親は、アフリカのケニア人ですから、確かにオバマ氏は「アフリカ系（黒人）」ということになります。しかし、母親はアメリカのカンザス州生まれの白人です。母親が白人なのに、オバマ氏を「黒人」と表記するのはおかしいのではないか、というのが私の素朴な疑問でした。オバマ氏のことを、「アフリカ系（黒人）」と表記するのなら、「アメリカ系（白人）」と表記することも可能ではないでしょうか。

こんな私の疑問に答えてくれたのは、十一月六日の日本経済新聞朝刊でした。国際面に「母が白人 オバマ氏なぜ「黒人」」という見出しの解説記事が出ていたので

す。

この記事は、父が黒人、母が白人のオバマ氏は、「米国初の黒人大統領であるとともに、四十四代目の白人大統領ともいえる」という見方を伝えています。私と同じような発想の人がいたのですね。（中略）

米国では国勢調査の際に「人種」を選びます。二〇〇〇年の調査から「混血（マルチレイシャル）」という選択肢が登場しましたが、（略）「米国では『ワンドロップ・ルール（一滴主義）』という考え方があり、少しでも黒人の血が入っていれば黒人と見なされた。最高裁は一九六七年に一滴主義を違憲と判断したが、その後も、色の黒い人はたとえ混血であっても『白人』を選択しづらい状況にある」。

私の素朴な疑問への答えであると共に、米国の人種差別の歴史の見事な解説にもなっています。

私も、各紙、各放送局の報道によって、オバマさんは、アメリカ史上初の「黒人」大統領だと「思い込んで」いました。しかし、この解説から私は二つのことを教えられ、自分の深い「思い込み」を気づかせて頂きました。

先ず、新聞などメディアの報道は、確かなものであるという漠然とした意識がありましたが、それでは大切なことを見逃し、さらに間違った思い込みを作り出すということです。

確かに、メディアを通して私たちは社会の様々な出来事を学び、そして、私たちの社会の主権が国民にあることを確かめ、お互いの人権が尊ばれ、平和な社会がこれからも続くように判断します。

しかし、今回のように「人種問題」という私たちの根深い差別意識が、こうした報道機関の中にも相変わらずなくなっていないということを教えられました。

次に、気づけなかったのは報道機関だけでなく、それを受けとめている私たちの側にも同じ様な「思い込み」があるということです。

例えば、過日、自衛隊の某幕僚長が「表現の自由」を主張した時、これは本来、強力な権力に対して、立場の弱い主権者のために約束された自由権であり、権力を持つ側の人が「表現の自由」ということを言い出したら、まったくナンセンスであるということに私は、なんとか気づくことができました。それで、私は内心、どうだ偉いだろうと思いが上がっていたところがありました。

しかし池上さんの解説を読むまで、オバマ氏「黒人」報道に関して見られる根深い差別意識が自分の中にあるということに、気づけませんでした。私たちは、こうした機会がないと、中々、自分の判断を確かめることができません。そして、自分の判断は、間違いのない、正しいという思いにとらわれます。こうした問題を報道機関の問題だと言って、人ごととして裁いていたら思い上がりだと気づかされます。

「自見の覚悟」という思い込み

親鸞さまは、お念仏を称え信心を恵まれる生活を通して、私たちのものの見方や考え方は、決して確かなものではないこと、そして、そうした私たちが作り上げている社会や政治の姿も決して確かなものではない、ということを教えてください。

それが、『歎異抄』の「後序」にある、「自見の覚悟」という言葉です。自見とは、自分の都合に立った見解ということで、覚悟とは思い込みといえるでしょう。

この言葉は、実は、聖徳太子にまでさかのぼるといわれています。太子は、これを「世間虚仮 唯仏是真」といわれました。意味は、「私たちの思い込みが作り上げている世間の価値は、いつか必ず壊れ無くなり、永遠のものではありません。しかし、そのことに目覚めさせる仏の教えこそが真実（まこと）であります」という意味になります。

お金も名誉も、地位も財産も、さらにいえば人間の愛情も、社会の制度も権力も、すべてはやがて変わりゆき、永遠に真実（まこと）として存在するものはないということです。

あるとき、このことを伝えると露骨にいやな顔をされたことがあります。私の伝えるタイミングが悪かったのだと思います。しかし、静かに自分を振り返り、この世のあるがままの姿に思いを向ける時、この事実気づかされます。

本当の「報恩感謝」とは？

この季節、勤められる報恩講は、親鸞さまの教えに出会い、私の本当の生き方を恵まれたことに感謝をする行事です。

この感謝は、自分の都合を満たしてくれるお金や地位や名誉や権力などを手に入れ舌なめずりして、「おかげさま、ありがたい」というものではありません。

この世の様々な出会いを通して、何が私を迷いの生き方に惑わす宗教か、そして、何が私を真実に目覚めさせる宗教かということを確認するのが、親鸞さまの教えを聞き届ける、この報恩講という行事です。

どうか、日々の暮らしの中で家族揃って、お内仏にお参りし、そして、お寺の報恩講で、聖人の教えを聞き直し、私を気づかせる教えを確かめて頂きたいと思います。そこに、本当にお互いがお互いを認め合え、あなたがあなたに成り、あなたがあなたで在る生き方が恵まれることと思います。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳（本多 靜芳）

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか？ お待ちしています（一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります）。

聖典の言葉

「本願^{りき}力^あに遇いぬれば
空^{むな}しく過ぐる人ぞなき」

『浄土高僧和讃』『天親菩薩讃』より

「この私」の一年

山陰の妙好人、善太郎さんは、一七八二年十月、今の島根県浜田市下有福町に生まれました。

一七八六年、五歳で母キヨと死別し、若い頃は暗くすさんだ日々を過ごしたので「毛虫の悪太郎」と呼ばれていました。トヨと結婚しましたが、サト(二歳)、ルイ(二歳)、ノブ(三歳)、そめ(三歳)と四人の娘を十一年の間に次々と死別するという深い悲しみに出会います。

以来、「よくよく重ねて重ねて、ご開山(親鸞聖人のこと)のご意見にとりつめて、お聞かせに遇うて」、ついに、念仏の信心を開かれ、その深い慚愧と歓喜がその生涯を支え、真実を依り所とした確かな人生を歩みました。

善太郎さんは、その後、念仏の信心の味わいを暖かい体温と土のぬくもりを感じさせる筆跡で数多く残しています。そのほとんどに、「この善太郎」という言葉があります。あるいは、「この」という二字を重ね、「このこの善太郎」とも書いています。ここには、真実に出遇った宗教的な深い実感があります。ちょうど、親鸞さまが、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」という深い自覚と重なるようです。

善太郎さんの「つねのおおせ」になっていた「この善太郎(がために)」の一句こそ、善太郎さんその人の一生の姿勢と精神を端的に言い表しているいのちの言葉であるといえます。

七十四歳、十一月付けの最後の手記には、「金剛の信心ばかりにて ながく生死をへだてける、この善太郎」と結んでいます。翌年、一八五六年二月八日、「有福の念仏ガニ」と呼ばれた生涯を終えました。如来の本願を聴聞し、念仏を日々の暮らしに称えることを通して、古い「善太郎」に死んで、新しい「この善太郎」に生まれ、「このこの善太郎」に生き通したのです。そこには、「毛虫の悪太郎」と呼ばれた苦悩と慚愧(はじる思い)があつたればこそ、自分の本当の課題に目覚めていく仏縁が恵まれたのでしょう。

成っていない私を知らされることが「この私」の始まり

今年、呉市に報恩講のご縁で出講しました折、お寺のお斎の包み紙に印刷されてあつた法話に感銘を受けましたので紹介をします。

団地に住む若い夫婦から、お仏壇をお迎えするのでお参りをして下さいと電話でご依頼がありました。お参りしてみると、小さなお仏壇がお迎えしており、お勤めの後、お茶を飲みながら、お仏壇をお迎えした理由を尋ねたそうです。

すると夫が、
「恥ずかしい話なので言いたくないのですが、実は、私たちには二人の子どもがいます。お寺の幼稚園に通っています。ある日の晩でした。ささいなことから夫婦ゲンカになり、勢いついて大ゲンカになりました。子どもたちは、「ケンカをやめてください」と泣きじやくりながら訴えるのですが、お互い退くに退かれず止めることができません。とうとう子どもたちは、泣きながら隣の部屋へ行ってしまいました。ケンカは続けていたのですが、ふと気になって隣の部屋を見てみました。すると、子どもたちが、きっと幼稚園で描いたのでしょうか、仏さまの絵を机において小さな手を合わせて拝んでいるのです。その姿を見て、私はハッとさせられました。「私たちは何ということをしてしまったのだろう。これ以上ケンカをしてはいけない」と思ってケンカを止めました。」

ここからは、お連れ合いが言われました。

「夫は、このことがあつて以来、お仏壇をお迎えするんだと言い出しました。でも、夫は今まで全くの無宗教で、仏壇を拝むような人ではないのです。「仏壇を買ってどうするの」と尋ねると、「毎日、家族で手を合わせて、そして、一家で仲良く暮らしていくんだ」と言うのです。普段、意見が合わない夫婦なのですが、これだけは意見が一致して、お仏壇をお迎えすることにしました。」

呉市のご院家さんは、

「なんていい話なんだろう。この家族はきっと幸せに暮らしていくだろうと思いました。少しでも、こんな家族が増えたら、夫婦で殺し合い、親子で殺し合うような事件も減るのではと思います。」

仏さまに手を合わせるの、人として大切な「やさしさ」「まごころ」「きよらかさ」を確認することであり、そして、そうならない自分を謙虚に反省することだと思いました。そして、仏さまとは、その「まごころ」の象徴として、私たちは毎日、手を合わせているのだと気づかされました。」

と書かれていました。

空しく過ぎる「この私」だからこそ

善太郎さんは、

「喰いたい 飲みたい 着たいで きのうも月日に送られ きょうも月日におくられて」

と、日々、空しく過ぎる、ご自分の姿を記しています。いや、そうした「この私」に出遇えたのは、阿弥陀如来の本願の呼びかけに出遇えたからでしょう。

「空しく過ぐる」、そんな私の姿をとうに見抜いておられるのが、大悲の如来さまです。そして、そんな私たちの一生を空しく終わらせることは決してないと、呼びかけてくれているのが、私たちが日々の暮らしで称える称名念仏の声です。

私の称える念仏が、如来の呼びかける念仏の喚び声であつたと確かめることの大切さを思います。そして、この時期になると、いよいよ空しく過ぎる煩惱だらけの濁った生活が、大きな功德によって気づかされ、深められ、そして、転じられていくことの尊さを善太郎さんや、お仏壇をお迎えになられた若いご夫婦の姿から教えられることです。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※読んで下さったあなた、第一水曜日午後六時半の法話会「ナムの会」に仏法聴聞にいらっしゃいませんか? お待ちしてます(一月と八月は休会。十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります)。

